

増補改訂版

ヴェールを脱いだ

# インド武術

甦る根本経典『タヌルヴェータ』



新泉社

## 口上——インド武術の『虎の巻』と呪いのこと

生前たがいに罵りあっていた少林寺拳法の開祖・宗道そうどう臣しんと極真空手の創始者・大山おおよま倍達ますた。しかし、「わが武術の源流、古代インドにあり」

ということでは両雄、口をそろえていた。インドの僧侶・達磨だるまさんが拳法を中国・少林寺に伝え、少林拳が琉球にもたらされて唐手（空手）になったというのである。

インド拳法。

ガキのときからインドと武術のオタクであった筆者を、なんとそそった言葉であろうか。そそられたのはわたしひとりでないらしく、格闘もののコミックや小説にもよくインド拳法が、

——最強の格闘技、神秘の武術

として登場した。が、オタクのわたしには、それが少林寺拳法にヨーガの雰囲気を加味してインドっぽくアレンジしたものであることはすぐに知れる。一九七〇年代当時『ハウ・トゥー・セックス』のようなベストセラー本はあっても、『ハウ・トゥー・インド拳法』はない。身近な『少林寺拳法入門』あたりを資料にするしかなかったのだ。

中国で文化大革命が終わると中国拳法がどつと世に出、それまで秘密のヴェールにつつまれていた八極拳や八卦掌などの技法書までが出版化された。それにもなつて、フィクションのインド拳法もさまがわりしてゆく。しかしインド拳法のハウ・トゥーものはいまだ出ていない。

けつきよく、自分で調べるしかない、と決めてインドに出かけた。調査法はこうだ。男のコと仲よくなる。男のコの遊びに、チャンバラごっことスモウのない国はない。相手をする夢中になる。万国共通だ。ただし、日本人はジュードー・カラテの真似ぐらいはできねばならない。

おもて表で遊んでいると、人垣ができる。大のおとなが挑戦の名乗りをあげる。といつても、そこはいい年こいたおじさん同士だ。おたがい、てきとうにじゃれあって納得する。むこうも、ずっと昔の子どものときのように遊べて、喜んでいる。が、そんな彼らの動きのなかにも、その民族特有の手足のつかいが見られる。こうして村人とも親しく交流できる。これも万国共通だ。

そのうち、ジュードー・カラテの先生になってくれと頼まれる。ぶつそうなヤツから挑戦状がまいこむ。夜逃げしたことも一度や二度ではなかったのだが……。

しかしその甲斐あって、クシティー（北インド一帯）、タン・タ（マニプル州）、パリカンダ（オリッサ州）、ナク・ア・カ・ムシユティ（グジャラート州）、ワルマアティ（タミル・ナードウ州）などと地域ごとに特徴のある伝統武術があることをつきとめ、じつさい、いくつかの道場の門を叩いた。

いずれもすぐれた武術である。その精妙なことは、日本や中国の武術に勝るとも劣らない。それは同じ身体文化で、武術とは不即不離の関係にあるインド舞踊を想像してもらえれば、容易に納得していただけよう。

ならば、インド武術がなぜ広く世に知られていないのか？

かの地の武術家が秘密主義に徹しているからである。わたしが体験したシク教（ターバンとヒゲがシンのボルノ宗教だ）の武術ガトカの入門式のもようを紹介する。

抜き身の刀が横たわっている。

「ひざまずいて、その刀身に額ひたいをつけなさい」

ニハングが命じる。ニハングとは、シク教における戦士の称号だ。

タージ・マハルで知られる地方都市アールラ。ぐうぜん入った安宿の受け付けの壁にチャクラム（武器としての円盤）が飾られていた。宿のあるじがニハングだったのだ。それを知ったわたしは、ガトカの手ほどきをしてくれ、としつこく頼みこんだ。

ためらっていたあるじも、やがて承諾した（もちろん、かなりのカネを支払うことになった）。しかし、武術は、

——秘伝である

と、彼はいう。ために、部外者には教えることはできぬ。そこで入門式を行い、かたちだけでも師弟関係を結ばねばならぬ、と。

入門式は、安宿の奥まったところに設けられた、あるじ一家の礼拝室で催された。礼装した他のニハング数名が列席した。

わたしもターバンを巻き、パンジャービーを着て、シク教徒のすがたをした。タルワールという反り身の刀が、偶像を持たぬシク教ニハングの御神体だった。花やお菓子や線香が捧げられている。

わたしは、命じられたとおりに刀にぬかずいた。額に冷たい熱がともった。

あるじが、手にしたオイルランプをゆらゆらと振りかざして、宜なした。

「刀は、神の力のシンボルである」

青みがかった刀身に光が撥はねた。インドの鋼はがねの特徴である滴しずのような、それが流れるような、無数の星からなる天の川のような紋様が浮かびあがった。

「神は、御みずからの刀で、全世界を創りだした。刀のエネルギーはシャクティと呼ばれる。それは物質を通して顕現するエネルギーである。神と我とは、シャストラ・ヴィディヤー（武術）の実践によって結

ばれる。そのとき——」  
と、彼はつづけた。

すべての行為はクリヤー（儀式）となる。  
すべての動作はムドラー（ヨーガの姿勢）となる。

すべての思考はディヤーナ（瞑想）となる。

これはシャクティ・ヨーガである。

ヨーガの歓喜と祝福は、マントラによつて表現される。

「さあ、ともに唱えなさい。ワーヘー・グルジー、ワーヘー・グルジー、ワーヘー・グルジー……」

「ワーヘー・グルジー、ワーヘー・グルジー、ワーヘー・グルジー」

わたしは唱和した。ここでいうグルジーとは、ニハングの制を定めたシク教十代法主ゴーヴィンド、および彼のしるした『サラブ・ロー・グラント』『ダシャム・グラント』の二聖典をさす。

「よろしい。これより、そなたはわれわれの家族である。しかし、ここで見たこと、聞いたこと、学んだことは、いつさい他言してはならぬ。さもなれば——」

神と、グルジーの呪いが、そなたの身を引き裂くであろう。

いずれの武術でも大同小異である。それを学ぼうとするとき、かならず入門式が行われ、同様の呪いがかけられた。

インド世界に長く身を置けば、呪いを信じる気持ちにも傾く。

しかし、インド南西部ケーララ州の武術カラリパヤットの道場だけはちがった。入門式のおり、

神は われら二人（師と弟子）を とともに守りたまえ

神は われら二人を とともにはぐくみたまえ

そして われら二人は とともに力を生ずるように

神は われら二人に 輝かしき学びを与えたまえ

そして われら二人は 敵対せぬように

という意味の有名なマントラを唱和させられる。が、呪いをかけられることはなかった。インド独立以来、この武術だけは広く一般に公開されてきたのだ。

それに一九八三年、イギリスBBCが放映した「戦士の道 The Way Of The Warrior」というドキュメンタリー番組が拍車をかけた。世界中の武術を紹介するこの番組は、カラリパヤットが現存する世界最古の武術と断定した。くわえて、その様式が、中国、日本、東南アジアに伝えられたのだ、と。いくつかの道場は、カラリパヤット詣でする欧米人の武術愛好家にぎわっていた。

そして、数あるインド武術のなかでも、もつとも注目すべきが、このカラリパヤットであった。BBCがいうとおり、カラリパヤットは、叙事詩の英雄が活躍する数千年前の、ヴェーダ時代の武術のおもかげをいまに伝えていた。それじたいが無形文化財といってよい。カラリ（道場）には、古代の叡智が結晶していた。

しかしわたしは、別のことで呪いを買うことになる。

親しくなった道場生の若者が、自宅に招いてくれた。夕食が終わり、談笑となった。親日家でエンジニ

アの父上が話に加わり、日本のカメラをひとしきり礼讃する。

武術に話題が移った。

若いころはご自分もカラリパヤットの修行をしたという父上が、古文書を持ち出してきた。貝葉写本、すなわち椰子の葉にしるされた手書きの本である。

「二千年前に書かれた奥義の書だ。うちの先祖にグルツカル（師範）がいてね」

表紙にミミズがのたくったような文字でなにやら刻されている。ケーララの文字だ。

文字だけはなんとか読める。インド全国では十何種類かの文字が使われている。わたしは初めて入る州では、まず子ども用のイロハ本を買って、文字をおぼえた。いずれも五十前後の字母からなる表音文字だから、記憶するのに大した苦労もない。またそうしないことには、英語の通じないところでは、バスにも乗れないのだ。

「ええと……カ、カルリカー……プラ……ディーピカ、サンスクリット語だな」

サンスクリットは、日本ではナーガリー文字で書写されるように思われがちだが、ナーガリー文字は北インドに流布する文字である。他の地方では、それぞれの地域の文字でサンスクリットを記述するのが、むしろふつうなのだ。

そして「カルリカー・プラディーピカー」とは、「武術道場の灯明」ぐらいの意味である。それがその写本のタイトルであった。

父上が、糸で折本式に綴られた写本を広げてみせる。二千年前といっても、なんども書き写されたものだ。細かい文字が淡褐色した椰子の葉をびっしりと埋めている。線刻されたイラストもある。躍動する人びとの象だった。

これぞ探し求めた『ハウ・トウー・インド拳法』だ。

わたしは一眼レフと接写リングを取り出した。

「だめだっ！」

父上が怒鳴った。その烈しい剣幕に、わたしは腰を抜かした。

「驚かせてすまなかった。だが、これをカメラで撮ったりしたら、きみに呪いがふりかかることになる」

「……」

「マントラというものを知っているかね」

「はい、神秘的な呪文です」

「私の考えでは、心をもった言葉のことだ」

「言葉が心を——」

「ふむ、詩や文のようなものも、百年も読みつづけられていると、少しずつ心が生じてくる」

「生きもののように——」

「そう、言葉はそれじたい独自の靈魂をもった生きものなのだ。たとえば、『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』といった長い長い叙事詩がある——」

叙事詩は、なんらかの理由であまり人には読んでもらいたくない箇所も有している。そのすべてを暗記している吟遊詩人も、呪いがふりかかるとして、その部分はけっして詠唱しようとはしない。

「人間だってそうだろう。大事なところは下帯を巻いて隠す。もつとも、スッポンポンの行者さんもいるがね」

「はあ」

「その書も、二千年ものあいだ読みつがれてきた。言葉のひとつひとつに戦士たちの血と汗が染みついていて。それがアートマンを孕んだのだ。かれはカメラという安易な手段で撮られることを望んでいない」

「それなら——」わたしはいった。

「書き写すのは、よろしいのでしょうか？」

「書き写す？ きみが、かね」  
「はい」

そうして、彼の家に通うことが始まった。毎日、二、三時間ずつ書写する作業に没頭する。その時点では、文は明確な意味を結んでいない。とにかく、文字というより椰子の枯葉に住みついた夥しいミミズの群れを、紙のノートに増殖させた。

二週間かかって、すべてのミミズを写し終えた。イラストも模写した。

「よく、がんばったね」と父上。

「しかし、もし、きみがそれを読めるようになっても、けっして他言してはならないよ。さもなければカラリの神々の呪いが、きみの身を引き裂くであらう。」

それから二十年がすぎた。

『カルーリカー・プラディーピカー』——今後はわかりやすく『虎の巻』とよばせてもらおう——は、とつとつに訳し終えていた。関連書として、インドで出版されている『ダヌルヴェーダ』文献——古代のヴェーダ武術の根本テキストだ——も、いくつか訳してみた。

もの書きになって、十年がすぎた。

インド武術のことを書くときは、テレビの紀行番組で武術が紹介されているのを見て、

——ここまで映したのなら、ここまで書いてよからう

と、自主規制しながらの記述をつづけてきた。

ところがこの数年、インド武術界をとりまく状況ががらりと変わった。これまで秘密主義に徹してきたインドの武術家たちが、積極的に情報公開をするようになったのだ。日本では本書がおそらく最初のこ

ろみになると思うが、欧米ではインド武術本が矢継ぎ早に出版されている。そんなものはインターネットでも手に入るから、いくつか読んでみた。

——えっつ、ここまで書いちゃつていいの!?

というのが第一印象だった。『虎の巻』が「他言厳禁」としている<sup>⑧</sup>情報も平気で書かれている。いったんしゃべり出したら、かれらもインド人である、口が閉まらなくなるのだろう。

原因は、だいいちに武術家たちが食っていけなくなったことにある。

マハーラージャ時代は、すぐれた武術家たちは貴人のボディガードをしたり、王家の若者に武術を指導したりして、物質的にも恵まれた暮らしをしていた（もつともイギリス支配時代、弾圧された伝統武術もけっこうある。カラリパヤットもそのひとつ）。ところがインド独立とともにマハーラージャ制は廃止された。かれらは失職してしまったのだ。

あるマージャーアート専門誌に、元マハーラージャのインタビュ記事が掲載されていた。彼は少年時代の思い出として、

「武術の修行をやらされた。教師はひじょうに尊敬されていた」

と語る。インタビュアーが、

「そのグルの一族はいまなにをなさっていますか？」と訊くと、

「町で日雇い労働をやっている、と噂で聞いた」

そういう時代なのだ。

くわえて最近では、日本のカラテ、中国のクンフー、韓国のテコンドーの道場がどんどんインドに進出している。じぶんたちが秘密主義に徹して、肉体労働で糊口をしのいでいるうちに、外国の武術家がインドで荒稼ぎしている。

ために、かれらも情報公開して、インドのエキゾチックな武術を売り物に、外国から入門者をつのる

ようになったのだ。

日本式の段位制度、ブラックベルト制も採りいれているところもある。

たいへんオシャレにもなった。むかしはどこもフンドシいっちょで稽古していたが、いまではシルクのカラフルなトランクストとジャケットをつけて、トレーニングするところも多い。

ボクシング・グラブやスパーセーフ（強化プラスチック製のマスク）をつけて、がんがンスパーリングしている道場もある。インド武術がK-1のリングに登場する日も、そう遠くはないかもしれない。

そんなわけだから、わたしももう秘密を守る必要がなくなったのだ。しかし——。

ようし、書くぞ、と思っていた矢先、インド学者の上村勝彦氏（かみむらかつひこ）が五十代の若さで亡くなられた（二〇〇三年）。

インド武術ともかわりが深い『マハーバーラタ』のサンスクリット原典からの訳書を上梓（ちくま学芸文庫）されているさなかでの急逝だった。全十一巻の予定が八巻で止まった。氏は第一巻の「まえがき」でこう述べている。

『マハーバーラタ』の英訳者（Van Buitenen）は、三冊目の訳書を出版したところで亡くなっている。『マハーバーラタ』と並ぶ叙事詩『ラーマヤナ』を翻訳されていた岩本裕先生は、二冊を出版されただけでこの世を去られた。この種の仕事は寿命をちぢめるものなのかも知れない。

呪いが身に迫る思いをしたことは、いうまでもない。

そこで、本書の執筆にあたって、呪いが焦点を結ばないように、いくつかの防衛をめぐらせた。

○わたしじしんの個人的な経験には触れない。

○固有名詞や道場の所在地は書かない。

○『虎の巻』は随所で特殊なマントラを扱っているが、それには触れない。

○「ですます」調の文体を基調とする。

そして、インドの文書に倣って、最初に、障害（しょうがい）の除去者ガネーシャ神に祈りを捧げる。

——シュリー・ガネーシャヤ・ナマハ！

本書は二〇〇四年六月、出帆新社より刊行された『ヴェールを脱いだインド武術 甦る根本経典』に加筆、増補したものです。

増補改訂版 ヴェールを脱いだインド武術●目次

口上——インド武術の『虎の巻』と呪いのこと 3

## 第二篇 カラリの武術

20

### 1 武術の始まり 22

- ❖ ヴィーラバドラ 22
- ❖ マーラ 32
- ❖ ガネーシャ 39
- ❖ パラシュラーマ 46

### 2 ヴェーダの武術 56

- ❖ カラリパヤットの始まり 56
- ❖ バラモンのケーララ伝来 58
- ❖ インド武術の根本経典 62
- ❖ 金剛拳(ヴァジュラムシュテイ) 70

### 3 むき出しの子宮 74

- ❖ 『カラリ』の語源 74
- ❖ 『カラリ』システムの完成 78



- ❖ インド風水 80
- ❖ 大地の(風) 84

## 4 野獣になる——体術—— 92

- ❖ レッツ・カラリ 92
- ❖ セルフ・アビヤンガと準備運動 95
- ❖ 脚の稽古 99
- ❖ 動物のポーズ 103
- ❖ ヨガ武術？ 114

## 5 人になる——武器術—— 122

- ❖ 大量破壊兵器はあったか？ 122
- ❖ 武器の種類 126
- ❖ 木製武器術(コールタール) 127
- ❖ 金属武器術(アンカタール) 132
- ❖ 武器をスーパー武器に易る<sup>かえ</sup> 134
- ❖ オッタパヤット——カラリの太極拳 137

## 6 勇者になる——拳法術—— 144

- ❖ カラリパヤットの拳法 146
- ❖ 拳は武器の延長 147
- ❖ 自然の武器 150

# 第二篇 カラリの身体 154

## 7 断末魔の悲鳴 156

- ❖ 「末魔」<sup>マルマン</sup>の定義 156
- ❖ マルマンの位置 162
- ❖ 「断末魔」したら 170
- ❖ 蘇生術(マルカイ) 173
- ❖ 達磨は来たか？ 176

## 8 末魔と経穴 182

- ❖ 『スシュルタ』のゆくえ 182
- ❖ 経穴(ツボ)との比較 185
- ❖ (氣)またはプラーナ 188
- ❖ 臍——脈管の根 192
- ❖ アムリタ・ニーラ——日周期 196
- ❖ 寝ぼけたマルマンをたたき起こす方法 199

## 9 末魔と密教 202

- ❖ ダナルヴェーダ瞑想の基本 202
- ❖ マルマンからチャクラへ 206
- ❖ 真言の秘儀(マントラ・タントラム) 210

第三篇 カラリの医術

10 タントラの医学 214

- ❖ マルマ療法のこんにち 214
- ❖ 鍼灸はある？ 218
- ❖ マルマ療法の原点 220
- ❖ マルマ療法の根本原理 223

11 アビヤンガとシローダーラ 226

- ❖ カラリの衰退とマルマ療法の伝播 228
- ❖ マルマ・アビヤンガ 229
- ❖ シローダーラ 235

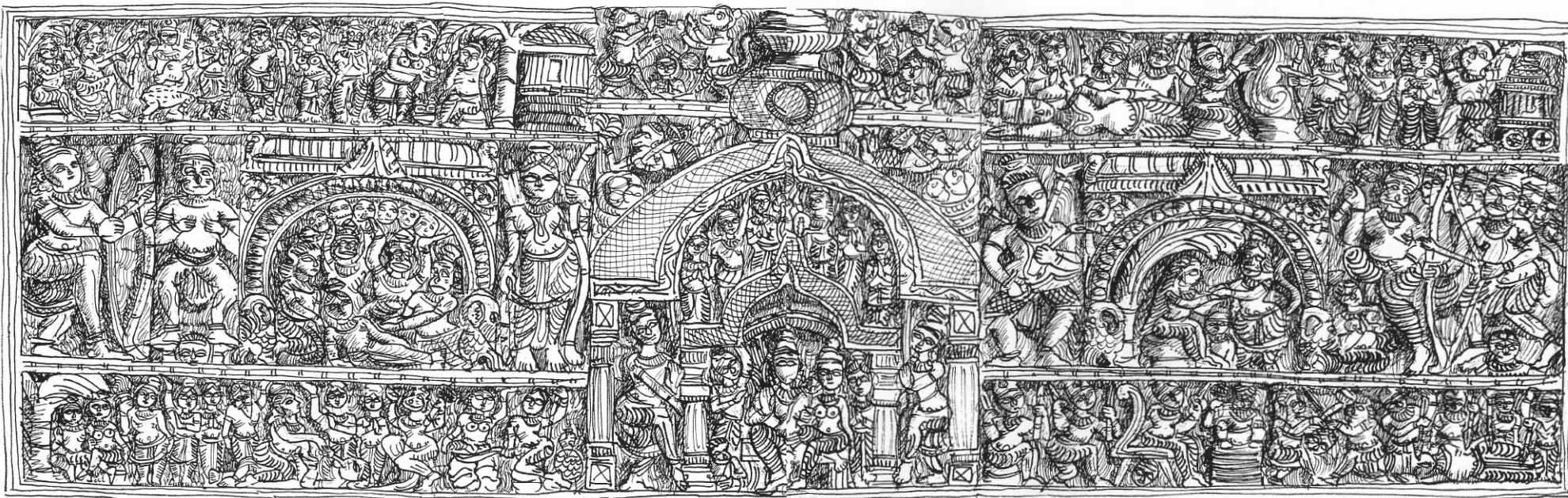
12 ウリチル究極のマッサージ 240

- ❖ 季節に合わせた稽古とマッサージ 240
- ❖ ウリチル・フルコース 245
- ❖ ウトサーダナ 254
- ❖ ヨーガの宝の動き 255

補論 シンハナトダ・ウアジュラムシュティ 獅子吼金剛拳——チベット密教の武術 258

- ❖ アダト伝説 258
- ❖ ドブドブ(僧兵) 260
- ❖ 不殺生戒 266
- ❖ 死のヨーガ 277
- ❖ 武者修行の旅 279
- ❖ 喇嘛拳 288

- あとがき 295
- 参考文献 xiv
- カラリパヤット関連年表 vi
- カラリパヤットの体系と術語 i



「ラーマヤナ」木彫パネル模写

## 第一篇 カラリの武術

インドのすべての学問・技芸がそうであるように、武術もまた神々に属している。大叙事詩『マハーバーラタ』で活躍する神々や英雄——かれらの用いた武術が、本稿でみるカラリバヤットの始まりだ。もうひとつの叙事詩『ラーマヤナ』の主人公ラーマ王子も、流派の開祖として、ラージプート族などによって崇拜されている。インドを離れ、タイの武術、ムエタイの開祖も、ラーマ王子なのだ。